

ダイベート授業の導入方法試論

一 序 論

一、一 問題の状況と先行研究

高等学校国語科において選択科目として「国語表現」が登場したのは、一九八二年度であった。以来、二〇年余りの間に「話すこと・聞くこと」の扱いは「書くこと」の扱いよりも増えてきているという^①。特に一九九〇年代半ばにダイベートが有効な教育方法として注目を集め^②、その普及が学校の教育現場でも進んだ。二〇〇三年度の学習指導要領の改訂では「国語表現Ⅰ」は「国語総合」と並んで必修選択科目となり、副教材の国語便覧に目を通すと、「古文」、「現代文」、「漢文」に続き、第四の柱として「表現」のページが割かれるなど「国語表現」の存在感は今後もますます高まっていくと思われる。

西 尾 勝 彦

さて、ダイベートに関しては多くの理論研究や実践報告がなされている^④。ダイベートを行う目的や論題の決め方、立論の仕方、進行の手順等は充分議論が積み上げられひとつの典型が完成しているといつてよい^⑤。

しかし、それらの理論をふまえた上で、実、際、に教員がダイベートを授業に、つまりクラスに持ち込もうとすると生徒が「フォーマルな場になるととたんに寡黙になる」など上手いかないことがある。「生徒たちは、ほとんどダイベートの経験がない。だから、どう準備したらよいかわからない」^⑦のである。この理由は、第一に生徒達が小学校から一斉授業に慣らされているからであろう。授業において話者は教員であり、生徒は常に聞き役であったといつても過言ではない。だから、ダイベートの導入時には細心の注意が必要である。

導入時の方法論についても様々な議論があるが、まだ改善の余地があると思われる。本稿は、ディベートの導入時におけるひとつの方法を提示しようとするものである。

一、二 授業計画

一、二、一 実践の位置づけと目標

私がディベートを試みようとしたクラスは高校二年生の理系クラスであった。与えられた単位数は二時間であった。国語科にとって⑨は最小の単位数といえる。

そこで年間計画を立てる際に、理系学部に進学する者に求められる素養⑩と最小単位数で最大限の効果を目指そうとする国語科にできることの接点をさぐった。そして、これまでの「読む」「書く」授業から脱却し、「聞く・話す」コミュニケーション授業を中心に行うことにした。

生徒自身が実際に「話す」、つまり「他者に説明する、説得を試みる」ためには、もちろん本や新聞、インターネットの情報を集めて「読み」、それらを分析しレジュメを作成（Ⅱ「書く」）しなければならぬ。さらに、質疑応答に備えてしっかりと他者の話を「聞く」能力も求められる。「話す」ことは、あらゆる国語能力が試されるといえる。何よりも他者と「通じ合おう」とするコミュニケーション能力が養成されると考え、その能力を高めることを目標とした。

た。

一、二、二 導入時に試みる方法

ディベートの導入に当たっては、前段階としてプレゼンテーションを生徒一人あたり二回させることにした。どんなにディベートの説明を受けたとしても、いきなり生徒全員の前で立論し討論することは難易度が高すぎると思われるからである。まず、二度のプレゼンテーション体験を通じて、レジュメの作り方、話し方、質疑応答の仕方、論理的思考を鍛え、人前で話す自信を持たせることが大切と考えた。個々の力が高まった後に、チームプレイでもあるディベートに向かわせることにした。

二 本 論

二、一 実施された授業

二、一、一 プレゼンテーションⅠ

Ⅰ 指導方法

生徒一人あたり一五分の時間を与え、用意したA4のレジュメ一枚についての発表（五分）と質疑応答（一〇分）をさせた。

レジュメには、最近読んで気になった新聞記事を貼り、その記事の要約二〇〇字、興味を持った点、疑問点、それに対する自分の意見・主張を書かせ（手書きも可とした）、事前に一度チェックを入

れた。発表前にレジメは生徒全員に配布させた。

今回は、新聞記事から題材をさがすよう限定したが、それは新聞を毎日読む習慣をつけさせるためであった。ただし、質疑応答に備えて各自で用意していた資料の情報源はインターネットが一番多かった。

II 生徒が取り上げた新聞記事

- 英語ですべて授業
- BSE感染牛
- 日本の悩み
- フーリガン
- 仮設住宅その後
- 個性
- 幼児の心臓移植
- 早食い競争
- 黄砂
- バリアフリー
- 広島平和公園
- 救急蘇生
- 食品表示違反
- ストレス社会

• 中古販売ソフト

• ひったくり

• 学校完全五日制

• 安全な公園づくり

• リサイクル

• 補助犬法案を可決

• 阪神が変わった！

• 著作権

• 北朝鮮脱出一家、日本総領事館駆け込み

• 車いすバスケットを通じて

• 高一生転落の七四歳救助

• 核弾頭一〇年で1/3に

• サッカーW杯による交通抑制

教育、国際、食品、平和、福祉、法律問題等、多岐に渡るテーマを取り上げ発表していた。生徒のみならず私自身も彼らの発表から学ぶところが多かった。

III 分析と検証

発表テーマによってではあるが、質疑応答が白熱し、あつという間に持ち時間が過ぎてしまうことがしばしばであった。何人もの生徒からの質問攻めにも臆せず答える者がいる一方、教壇上で用意し

た資料をあわててさがし立ち往生する生徒も多々いた。

「こんな授業初めてだったので緊張した^⑩」という生徒の意見に代表されるようにプレッシャーは相当のものであったようだが、予想以上に発表者の声は大きくこの授業に対する新鮮さからか意欲は充分感じた。

生徒たちの多くは新聞を読み、一つ記事を見つけてレジュメを作ることに精一杯で、質疑応答のことまではしつかりとした準備が整わなかったようであった。記事内容に関する質問、自分の意見に関する質問等を想定して詳しい資料を用意し、それを理解し消化して自分なりの言葉でわかりやすく説明することをしなければならぬと気づいたのは発表中であつたようだ。まったく手助けしてくれる人もおらず、ましてや逃げ出すこともできない状況に何人も生徒が追い込まれていた。なかには、インターネットで見つけた資料をたくさん用意しすぎたがために、逆に混乱して即答できない者もいた。まさに情報の波にのまれていく状況であった。情報を集めるだけでなく、その取捨選択と要約が必要であると痛感したのではないだろうか。

また、質問者側にも問題があつた。ある生徒がAという質問をした後に、別の生徒がBという先ほどの質問に関連する疑問をぶつけ、次はC、D……と徐々に質問によって議論が深まっていくべきなので

あるが、なかなかそのようにはならなかった。各自が思いついた質問を、場の流れを読まず単発に繰り返すことが多かった。(これは、大人の場合も多いが……)ひどい時には、それまでの議論をほとんど聞いていなかったのか、一度なされた質問をしてしまい発表者から「それはさっき答えた」と批判される者もみられた。

レジュメを作ること、質疑応答に備えること、そして、質問を受けること、そのすべてが生徒たちにとっては予想以上に厳しいものとして受け取つたようだった。

二、一、二 プレゼンテーション 2

1 指導方法

生徒一人あたりに四五分間を与え、自分の興味分野について発表させた。今回は、新聞に限らずどのメディアからの引用も可とし、前回と同様に二〇〇字の要約、問題点、意見等をワープロで書かせた。レジュメは、参考資料等も添付させ、B4用紙を三枚用意させた。当初は一人あたり二五分の予定であったが、最初の発表者の質疑応答が所定時間内に収まりきらず、生徒達から延長を申し出てきた経緯があつたことを記しておく。

II 生徒が取り上げたテーマ

- 青年海外協力隊
- 外来魚問題

- ・麻雀W杯
- ・壊れる南極の水
- ・通勤電車の混雑
- ・3ない運動
- ・台風の被害
- ・森林破壊
- ・男性型脱毛症
- ・ドラッグ
- ・薬物乱用防止
- ・煙草
- ・日本のラグビー
- ・エコーカー
- ・児童虐待
- ・うつ病
- ・視力低下問題
- ・剣道における国際化
- ・携帯電話
- ・温暖化
- ・バリアフリー
- ・水の環境問題

- ・温暖化
- ・紫外線の恐ろしさ
- ・肥満
- ・夏の食中毒
- ・日本ハム本拠地移転に見るプロ野球の今後
- ・なぜスポーツカーは廃れていくのか？
- ・ラグビー、アメフトが社会人大会を再編
- ・コピーコントロールCD

生徒自身の興味分野についての発表であったため、前回と比較すると身近なものがテーマに選ばれている。特にその当時、彼らが打ち込んでいた趣味やスポーツ等についての発表が増えている。

Ⅲ 分析と検証

前回の反省をふまえて、しっかりと準備を行い発表に臨んだ生徒が増えていた。「どのよう^に、みんなに^に伝えるのか^か、考えるのが難しかった^{った}」(傍点筆者)という生徒の感想は、自分のことで精一杯だった彼らの成長ぶりを物語っているだろう。

用意されたレジュメも「色々な本、雑誌、資料を用いて調べるのが楽しかった」、「自分の興味を持ったことを調べていくのが楽しかった」という感想の通り前回と比較しても余裕がうかがえる。

質疑応答についても、まだ教壇で立ち往生する場面も見られたが、

多くの者が質問に的確に答えていた。発表していたある生徒は、矢のように飛んでくる質問攻めを上手くこなし、発表終了間際に「今日は俺の勝ちやな」と呟いていたことなども印象に残っている。

二回の発表を通じて、資料の調べ方、レジュメの作り方、発表と質疑応答の仕方などの力が付いたといえる。それはもちろん「夜遅くまで起きて作業していた」生徒達の努力の賜物である。丸一時間を与えられて発表しなければならなかった彼らのプレッシャーは、相当なものであったに違いないが、それが逆に功を奏したのかもしれない。

質問者も発表を聞き、レジュメを丁寧に読んで、より核心をついた疑問をぶつけていた。規定の四五分よりも早く質問が途切れてしまふこともあったが、そんな時は私がそれまで黙り込んでいた生徒に質問を促すこともあった。一時間のうちに一度は発言するようにいつも指導していたが、全員を積極的に発言させることはなかなか難しいことである。

質問を促すと毎回クラスを「オオー」とどよめかせるような鋭い発言をする生徒もおり、黙り込んでいるからといって決して何も考えていないわけではないのである。発表の授業を通じて、生徒のいつもなら目に付かない特性が伝わってきたのは意外な収穫であった。

二、一、三 ディベート

I 指導方法

ディベートの授業に入る前に一度オリエンテーションを行った。まず、二〜三名の一〇チーム(A〜Jチーム)を結成させた。一〇チームでトーナメント表を作り、ディベートを勝ち抜き戦方式にした。次に、一人にひとつ、すぐには結論の出そうにない討論テーマを考えさせて黒板に書いていった。そして、その中から多数決で一四のテーマを選び、得票数の多い人気の高いテーマから順に14、13…と番号をつけ、それを自動的に対戦の順番とした。つまり、一番人気の高いテーマが決勝戦のテーマとなるわけである。さらに、敗者復活戦も組み込み、最低でも一チームにつき二回はディベートに取り組ませるようにした。この方式をとったのは、長期に渡ってディベートに取り組ませるためと、彼らの「勝ちたい」というモチベーションの高まりに期待したからである。その後、チームの代表者による対戦くじ引きを行いトーナメントの左側が「是」の立場で、右側が「非」の立場で立論することこれも自動的に決定した。ディベートの進行方法は、手元にあった「新訂国語総覧^②」を参考にした。

ディベートには、準備が何よりも大切と考え、「ディベート・シユミレーション」というプリントを用意した。立論については予め書かせておき、ディベート中にも利用できるように「反論」、「最終

「討論」の欄も用意しておいた。作戦タイムを利用して、この欄に考えをまとめさせディベート終了後に提出させた。勝敗の判定は、すべての議論が終了した後に生徒達の挙手によって決定した。

Ⅱ 生徒が考えた論題

- ① 高校生の免許取得
 - ② 戦争をすること
 - ③ 煙草自販機の設置
 - ④ 学校完全五日制
 - ⑤ 未成年の賭博
 - ⑥ 茶髪
 - ⑦ 増税
 - ⑧ 中高生の性行為
 - ⑨ 自殺
 - ⑩ 高校生のアルバイト
 - ⑪ 学校での勉強は必要
 - ⑫ 安楽死（準決勝）
 - ⑬ 未成年の実名報道（準決勝）
 - ⑭ 学校での携帯電話所持（決勝）
- ## Ⅲ 分析と検証
- 生徒達は、「ディベート・シミュレーション」を基にして理路整

然とした議論を行っていた。多くのテーマが生徒達にとって身近なため、立論もしやすかったと思われる。

準備段階では、「夜にみんなでチャットを使ってなかなかまとまらなかったことが一番印象に残っている」とあるように、チームとして主体的に取り組んでいたようであり、成長の跡がうかがえた。

また「チームワークが大切だと改めて分かった」とあるように、これまでとは違い、話す人、メモをとる人、知恵袋的な人など、役割分担しておく必要があったようである。「座っている時に発言している人にアドバイスするのが楽しかった」という生徒のようにそれぞれの得意分野を生かして助け合い議論を進めていた。

中には「言いたいことがうまく言い表せなくてもどかしい思いをした」、「相手の質問に答えるのがとても大変だった」、「自分の考えと全く反対のことに賛成しなければならぬことがつらかった」等、これまで以上に相手を説得するための苦勞が多かったようである。

二、二 試みた方法の評価
二、二、一 方法の有効性

「プレゼンテーションで学んだことをすべて出して、最後までがんばった」とあるように、生徒自身が二回の発表によって人前で話すために必要なことを体得していたため、スムーズにディベートに取り組めたようであった。

このディベート実践が滞りなく進んだのは、二回のプレゼンテーションを通じて生徒達がフォーマルな場で話すことに大きな自信を持ったからであろう。生徒達の内面にディベートを充分こなせる「話す土台」ができていたのである。

一回目のプレゼンテーションで様々な問題点を生徒自身が感じ、その解決を二回目のプレゼンテーションで図ることによって個々の「話す」能力が高まったといえる。そしてその能力を結集してディベートに臨むことができたので、活発な議論が起きたといえる。

二、二、二 目標への到達度

一通りの授業が終了した後にアンケートで「授業で身に付いた能力はどのようなものですか（複数回答可）」という質問を投げかけた。

「問題点を見つけ、解決しようとする能力」には一二名、四一%の生徒が当てはまると回答した。「人前で論理的に話し説得する能力」には二〇名、六九%の生徒が、「論理的に文章を書く能力」は一一名、三八%、「人の話を聞く能力」は二三名、四五%の生徒が身に付いたと回答した。「特になし」も一名、三%いた。「その他」の自由記述欄に「物事について深く考え直す力」、「物事を部分的ではなく全体的に見ることが出来る能力」と書いている生徒もいた。このように何らかの能力が身に付いたと答えた生徒は延べ五八名

おり、一人あたり二つの能力が身に付いたと答えたことになる。少なからぬ成長を遂げたことは、「どれも目新しい事ばかりで不安でしたが、上手くなっていく自分に気づいて楽しかったです」と述べている本人達が一番実感していることであろう。目標としていたコミュニケーション能力を高めることはほぼ達成できたといえる。

三 結論

三、一 結論

ディベートをスムーズに実践するために、前段階としてプレゼンテーション体験を二回行わせるとは、有効な方法であることが確認できた。

三、二 残された問題点と今後の指針

残された問題点として二点指摘しておきたい。まず、長期に渡る時間が必要なことである。標準的な四〇名クラスで、同様の試みを行うと週四単位としてもディベートにたどりつくまでに八週間以上の期間を要する計算となる。ディベートの実践を含めるとまるまる一学期間がかかることになる。

もう一つは、表現授業全般に渡る問題点でもあるが、最初に生徒にはつきりとした目標、目的を示さなければ活発な議論が起こりにくいことである。「聞く・話す」ことを中心とするコミュニケーション

ヨン授業では最初の授業計画立案と目標設定が肝心である。
今後の研究の指針として、さらに簡素かつ効果のある導入方法の
検討と実践がのぞまれる。前回の拙稿^⑮では「書く」表現授業の実践
報告を行ったが、今回の実践を終え、授業はやはり生徒達の活発な
表現の場、コミュニケーションの場であるべきとの思いを強くした。
学年やクラスの状態を充分に把握、分析し、必要と考えられる表現
を伴った授業の開発と研究をこれからも進めていきたい。

注

- ① 平田美保子「高等学校国語科と『話すこと・聞くこと』指導との関係」(『月刊国語教育』二〇〇四年七月号)東京法令出版、九六〜九九頁
- ② 中村敦雄「話すこと・聞くこと」の学習指導方法に関する研究成果と展望(全国国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』、明治図書、二〇〇二年六月、二二〇頁)
- ③ 例えば、「カラー版新国語便覧・増補二訂」(第一学習社、二〇〇三年一月)では、「表現の学習」として三〇ページが費やされている。
- ④ 前掲書 注②
- ⑤ 花田修一「討論(ディベート)のための教材研究・中学校」と藤森祐治「討論(ディベート)のための教材研究・高校」(川本信幹編集・監修 月刊国語教育二〇〇四年五月号別冊『新しい国語科を拓く 教材研究・開発マニュアル』、東京法令出版、三四〜四一頁)
- ⑥ 有栖川礼子「ディベートで悪戦苦闘・後編」(『月刊国語教育』二〇〇四年七月号、東京法令出版、四四〜四五頁)

⑦ 富谷利光「論文からディベートへ、そして論文へ」(藤岡信勝編著『教室ディベート入門事例集』、学事出版、一九九四年三月、八六〜九〇頁)

⑧ いくつかの方法論を挙げる。

・ディベート大会のビデオを見せる。

喜岡淳治「本格ディベートで国語科授業の活性化」(明治図書、一九九五年六月、一二頁)

・ディベートの説明に時間をかける

池田修「中学校国語科ディベート授業入門」(学事出版、一九九五年八月、二〇頁)

・実際に練習させながら教えていく

坂口隆「教室ディベート最初の一時間」(藤岡信勝編著『教室ディベート入門事例集』、学事出版、一九九四年三月、七六〜八〇頁)

⑨ 二九名(男子二七名、女子二名)の学級であった。

⑩ 理系学部に進学するとゼミや研究会等、人前で論理的に話さなければならぬ機会が多いと予想した。

⑪ すべての授業が終わったあとにとったアンケート調査より。以下、括弧内の生徒発言は、この調査からの引用である。

⑫ 「新訂国語便覧 第二版」(京都書房、二〇〇一年一月)。第二版よりディベートの項目が付け加えられている。

簡単な流れは、以下の通りである。

一、肯定側・否定側の立論(五分づつ)

二、作戦タイム(五分)

三、それぞれ反論(五分づつ)

四、再び作戦タイム(五分)

五、それぞれ最終討論(五分づつ)

六、傍聴者の判定と意見（五分）

さらに、司会者を置き、両チームと傍聴者に残り時間の提示をさせ、スムーズな進行を心がけた。

- ⑬ 藤森祐治「討論（ディベート）のための教材研究・高校」（川本信幹編集・監修 月刊国語教育二〇〇四年五月号別冊『新しい国語科を拓く教材研究・開発マニユアル』、東京法令出版、三八〜四一頁）をもとにする。プレゼンテーションには、課題を発見する力、問題を分析する力、論理を組み立てる力、その場で質疑応答をこなす議論力などが挙げられよう。ディベートにはこれらに加えて、情報操作力、批判的思考力、メタ議論力の能力が必要である。

- ⑭ 前掲 注⑪

- ⑮ 卒業式後のホームルームでの出来事であるが、担任教諭の話によると、保護者も見守る中で自主的に一人ずつ順番に前に出て卒業するにあたってみんなに言いたいことをスピーチしていったという。

- ⑯ 拙稿「俳句授業の試み ショートストーリーの作成を中心に」（『同志社国文学 第六〇号』、二〇〇四年三月）